

2.4 考古学フィルムライブラリ

2.4.1 はじめに

奈良をはじめとする近畿圏は考古遺跡が豊富に存在する地域であり、古くから発掘調査が多く行われている。調査研究に携わる考古学者は、何十年にもわたって遺跡発掘の写真を重要な資料として撮影し保存してきた。しかし近年になって、次のような問題が発生してきている。

- カラーフィルムの退色が始まっている。色の寿命は30年ほどである。
- 数が膨大であるため、整理、管理、保存が大変である。
- 写真は一般に倉庫に保管されているか個人で所有しているため、他の研究者が利用しにくい。

以上の問題を解決するために、ある考古学者と協力し電子図書館の基礎技術を応用して考古学フィルムライブラリのプロトタイプを構築した。従来の電子化技術を活用してフィルムの電子化を行い、メタデータ概念を取り入れて日本考古学に特有の情報を付加し、検索、整理に適用した。

2.4.2 考古学メタデータ

考古学フィルムライブラリの設計と構築にあたってもっとも重視したのは、考古学に関するメタデータの設計である。インターネットなどを通じて公開することを前提としているため、まったくの独自ではなくある程度標準化を意識していることが重要となる。本ライブラリは電子図書館、電子博物館を中心に標準化が進められている Dublin Core Metadata Element Set (RFC2413) [3]をベースとしてメタデータを設計した。また実際に利用する考古学者に有益であるよう、考古学者の意見を多く取り入れた。構築した考古学フィルムライブラリは参考文献[4]で公開しており、インターネットを通じてアクセスすることができる。

2.4.3 考古学フィルムライブラリ

図1, 2に考古学フィルムライブラリの検索画面と検索結果例を示す。

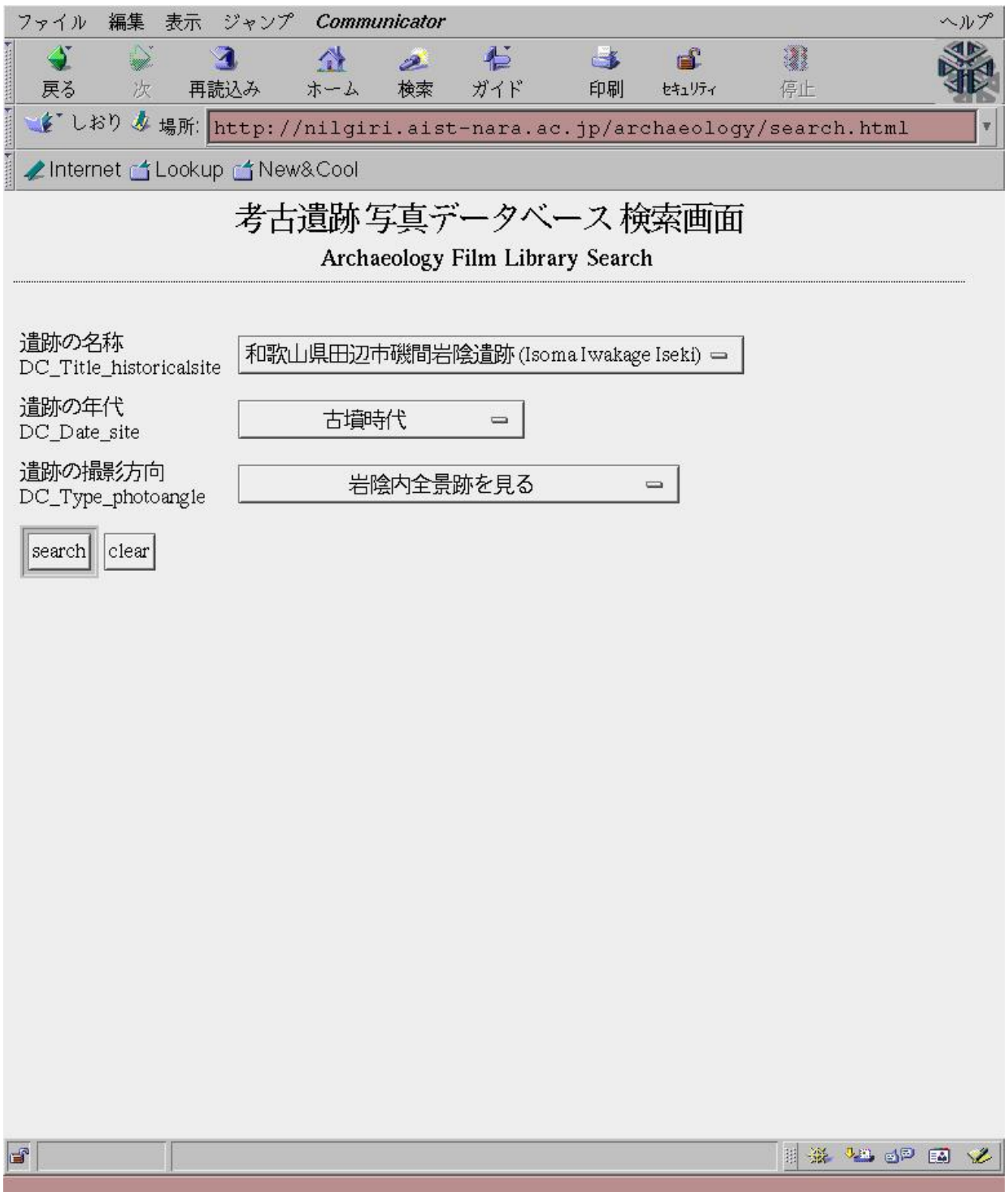


図 1. 検索画面

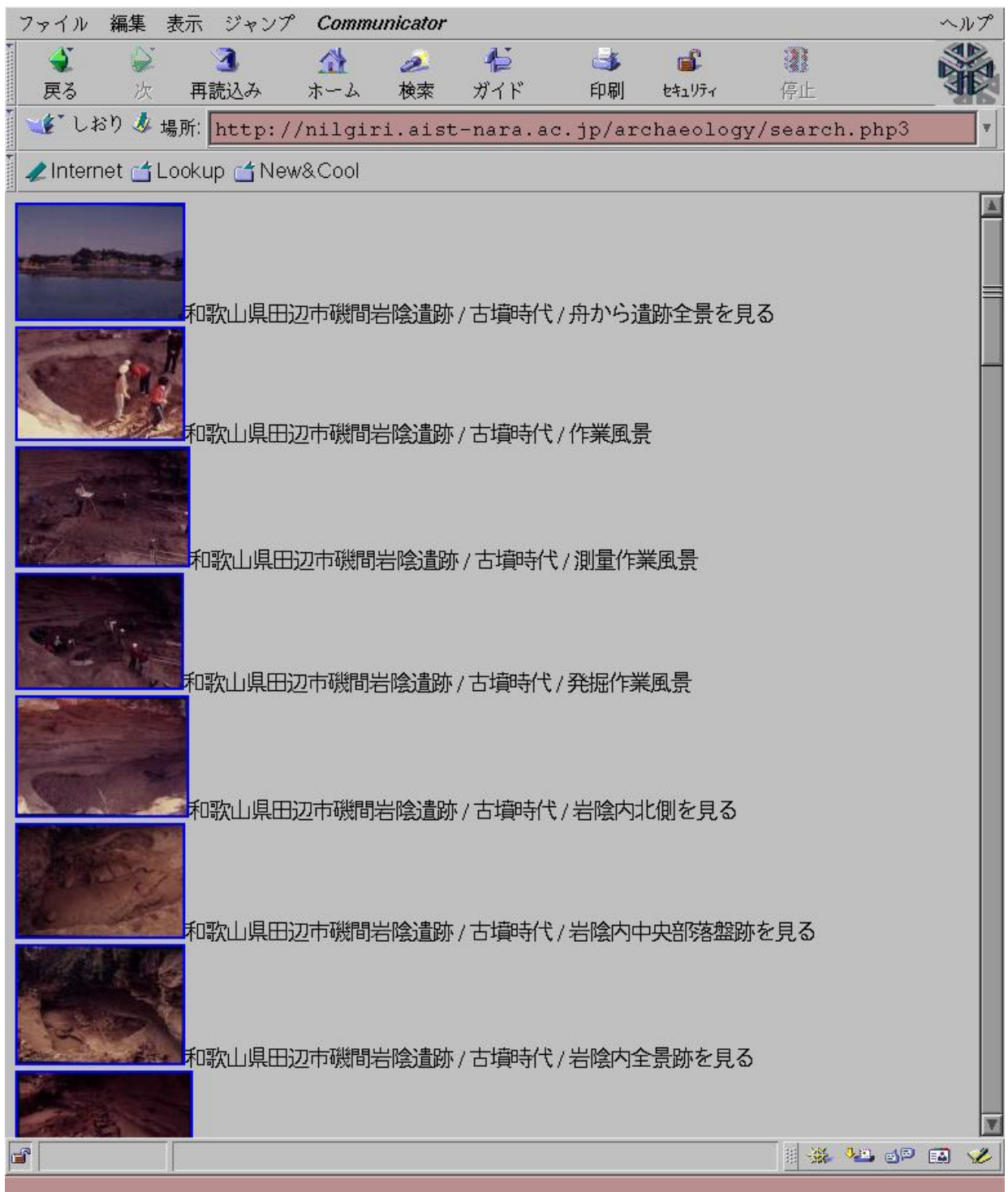


図 2. 検索結果画面

2.4.4 まとめ

現在、考古学フィルムライブラリには 150 枚のフィルムが電子化され管理されている。発掘調査写真は数万枚存在するため、今後これをすべて電子化していく必要がある。また実際に複数の考古学者に利用してもらい、メタデータの過不足についても評価していく予定である。また最終的にはデータの集計や整理も本ライブラリの上で行えるようにし、考古学研究の統計や整理の補助を行えるシステムとしていくことが目標である。

参考文献

- [1] Rei S. Atarashi, Masakazu Imai, Hideki Sunahara, Kunihiro Chihara, Tadashi Katata, "Building Archaeological Photograph Library", Research and Advanced Technology for Digital Libraries, 4th European Conference (ECDL2000), pp.456-460, Sep., 2000.
- [2] 今井正和, 新 麗, 羽田久一, 砂原 秀樹, 堅田 直, "遺跡・遺物の写真ライブラリ構築", 日本情報考古学会第9回大会, pp.55-58, 2000年3月.
- [3] <http://www.dublincore.org/>
- [4] <http://nilgiri.aist-nara.ac.jp/archaeology/>